

江口渙自選作品集

第

汪白溪自選作品集 第三卷

江口渙自選作品集 第二卷

定価 一六〇〇円

一九七二年十月三十日 初版

著 者 江 口 渙

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

郵便番号一〇二

東京都千代田区富士見二の一三の一四

電話東京(二六二)四七三二(営業)

(二六五)二〇七五(編集)

振替番号 東京 一三六八一

印刷 亨有堂印刷株式会社

製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

第二卷

目次

ブラック・リスト	1
無限廻転機	14
最後の夜	60
峠	99
無数の写真機	108
留置場の一隅にて	129
恋と牢獄	176
車中の出来事	287
帰れる弟	292
雑草の怒り	321
彼と彼の内臓	333

救援耕作……………368

漱石山房……………371

非常時母の会……………387

三等車……………399

人生の入り口……………411

解題……………小林茂夫……………459

装丁 丁まつやま ふみお
題字 著者

ブラック・リスト

私は窓際の片隅にある小型の卓テイルを占めながら、ほんとうの一人ぼっちで、ちびちびとウイスキーの盃を嘗めていた。

往來には研ぎすました白刃のような鋭さでしきりに木枯しが吹いている。それが窓へぶつかるたびに、立て付けの悪い硝子窓ガラスは、がたがたと氣持の悪い音を立てては、ストーヴに暖められた室内の空気を絶えず脅かした。そして、ともすれば硝子戸の隙間を透して、私の襟元を痛いほどに突き刺すので、私はやむなくいったん折った外套の襟を、また、立て直したほどであった。

私の左手の卓には四人の学生が、やはり、ウイスキーか何かを飲みながら、盛んに談笑にふけっている。そばには中央のストーヴに近く、二人の若いウエイトレスが腰掛けている。一人は前を割った束髪であるが、もう一人は思いきり大きな結綿ゆいわたに結っていた。真上から電氣の光を浴びるためか、結綿にかけた手絡てがら〔まげの根もとに掛ける色もよりのきれ〕の淡桃色とんきいろが際立って鮮かに冴えていた。

流行性感冒を怖れて、私が永らく夜歩きをしなかった間に、このカッフェの女もすっかり入れ替ったものらしい。二人とも私には今夜が初めての顔である。そのため、二人は私の卓の上へウイスキーの盃と、サラダの皿とを置くと、すぐまた、前と同じように学生たちのそばへ席を占めてしまったのだ。私は今夜本郷の友人を訪ねて帰りかけると、あまりに寒さがひどいので、軀を温めるために久しぶりでこのカッフェの二階へ上ったのである。ところが女将と女将の妹とのほかは、女の顔がすっかり替っているの、少し張り合いぬけがしながら、ぼつねんと片隅の卓を占めたのであった。しかし、あんまり一人ぼっちなので、少々手持無沙汰になった私は、雑誌か何か、こんな時に読む物を一つも持たず来た事、いまさらのように後悔した。

隣の学生は、みんな同じように角帽をかぶって、小ざっぱりとした紺飛白の羽織を着て、きちんと袴をはいている。中で一番年かさらしい髻のあるのが、私と同じ色の鼠の外套を着て、一番若いのが学生マントを着ていた。あるいは学生マントを着ているから、一番若く見えたのかも知れない。よくこういうところで見かける安っぽい縞銘仙の羽織を着て、烏打帽子をかぶった連中より、同じ大学生でも学生らしいだけ、私にははるかに好い感じを与えた。

四人は側にいる女たちをあまり顧みないで、しきりに話し続けている。手持無沙汰である私は、自然と隣の話に耳を傾けていった。みんなの声がそれほど高くないのと、私の耳が少々悪いのとで、どうもはっきりと聞き取れない。それでも全体の話題から推しはかると、四人とも帝大の経済部の学生であるらしい。話題の中心は、おもに最近クロボトキンを論じて刑事問題を引き起した同部の助教授折戸氏に関するものであった。話題が話題であるだけに、私はなおさら一語をも聞き洩らすまいと耳をすました。

「だけど折戸さんもちよっと人相の悪いところがあるな。あの眼球がいやに光るところだけだって、政府から見れば安寧秩序を害するような気がするかも知れないぜ」

髻のある男がこう言つて愉快そうに笑つた。

「しかし、まさか朝憲を^{びんらん}紊乱するほどの眼球じゃないよ」

学生マンントの男が答えた。そして、みんなが一緒にどつと笑つた。

「大槻さんにいたつては、治安などは、ぜんぜん妨害しない人相だな。……實際とんだところでおんだ目に会つたものだ。……今頃は、例の兎みたいな眼球をくるくるさせては、検事局でどう答弁してやろうかなんて考えているんだろいな」

「大槻さんの眼球だって、兎みたいに柔和なものか。あれでずいぶんぎよろぎよろ睨むぜ。ハハハハハハ」

眼鏡をかけた男がそんな事を言つた。その男の眼こそ、ほんとうに兎のように柔和であつた。

大槻君はやはりこんどの朝憲紊乱事件をひきおこした折戸氏と同じく、經濟部の助教であつた。そして、折戸氏の問題になつた論文を載せた雑誌の編集名義人であるため、ついに折戸氏同様起訴せられたのであつた。私は大槻君を高等学校時代から多少個人的に知つていた。ことに三、四年前、私が新聞記者をしていた頃、偶然同君を当時の同君の勤め先である大蔵省の一室に訪れた事があつた。その時、同君は私に新聞記者などは一日も早くよして、もう一度小説を書かないかという事をじゅんじゅんとして説いた。そして、その後三週間たつて私は大槻君の忠告どおりに新聞記者をよして、多少生活上の危険を冒しながらも思い切つて原稿生活者の群に入つたのであつた。そんな関係上、こんどの朝憲紊乱事件が起つて大槻君の名が新聞紙上に伝えられ始めると、私はなお一層の興味と注意とを

もつてその成り行きを眺めたのであった。で、今夜も隣の四人の大学生の口から大槻君の名前が洩れると、なおさら注意深く聞き耳を立てたのである。

四人はそれほど大きな声を立てないけれども、言葉の調子から推して十分緊張している事がよくわかる。無論、事件が日頃から自分たちに親しかつた青年助教授の上に落ちかかつた災厄であるだけに、なお一倍興奮しているであらう。

四人の話題はそれからそれへと進んで行つた。経済学部のお教授連のふがない事や、法学部の某教授が自己の失墜した勢力を取り返すためにこの事件を利用したかというその陋劣な態度や、この分では大学内における新思想家たちは近くむりやりに一掃されてしまうであらうという事や、ことに、温厚篤学な阪野博士が去年の労働代表人選問題の犠牲になつて以来、けちのつき出した経済学部はこれでいよいよ全滅だ。これから先、われわれ学生はいつたはどうしたらよいのだらう。こんな事を、四人は落ちついた、しかもどこかに悲痛な色のみなぎる態度でもつて話していた。

かれこれ三、四十分も経つた後であつたらうか。突然、梯子段の下でデカンショを唄う胸間声どうまごゑが聞こえたかと思うと、がたがたと騒々しい音をさせながら、二人の男が上がつて来た。一人は角帽をかぶつて、思い切り派手ではあるがかなり古っぽけた染飛白の羽織を着てだらしなく袴をはいている。そして、もう一人は黒の詰襟つみぎんに粗末なオーバーを着て、烏打帽子をかぶっている。詰襟の男は毎月私の家へやつて来るガス会社の集金人によく似ている。

「おらに選挙権な、ぜくれぬ」

染飛白の角帽は四人の大学生にちらりと瞳をなげたあとで、再び胸間声を張りあげて普選運動のデカンショを唄いながら、どさんと大きな音をさせて椅子に腰をおろした。そして、空いている中央の

卓に右手の臂を凭せながら、半身をねじって二人のウエイトレスの方を見た。

「こら。女。……酒だ。酒だ。酒持ッて来い」

男は大分酔っているらしく、こう怒鳴っている間にも、幾度か荒々しく息を吹いている。

「日本酒でございますか」

結綿の女が椅子を立てて聞き返した。

「日本酒でも、ビールでも、ウイスキーでも何でも持ッて来い。みんな飲んでやる」

「じゃ。何にいたしましょう」

「みんな持ッて来い」

「あんた。今夜は大分酔うとるから、もうあんまり飲まん方がえい」

そばの椅子に腰をおろした詰襟の男は、笑いながらせめるようにこう言った。ひばしになった鼠のような小柄な顔は、不恰好に長くわけている髪のために、なお一層小さく見えた。

「こら。女。……酒を持ッて来いッたら、持ッて来んか」

「じゃ。日本酒にいたしましょうね」

女は染飛白の角帽はすてておいて、詰襟の方へ顔を向けた。

「うん、日本酒にしよう。それからカツとオムレツを持ッて来てくれ」

詰襟がこう答えると、結綿の女はさらにもう一人の女をも促して、すぐさま梯子段を下りて行った。

その間にも染飛白の角帽は依然として、普選運動のデカンショを唄っていた。そういうデカンショがこんど新たにできたという事は私も新聞で知っていたが、唄うのを直接聞いたのはこれが初めてで

あった。で、どんな名文句かといふ興味をひかれたので、その男の狂騒に近いほどな胴間声をがまんしながら聞いていたが、どれもこれも歌詞としてはあまりになっていないのがっかりした。石炭を掘らなければ機械がとまるとか、労働者だって人間であるとかいうような文句の意味は賛成であるとしても、それがみんな歌詞としてはあまりに理屈が先へ立っていて、裏に隠れたほんとうの心持が少しも出ていない。そのうえ、どの歌にも「おらに選挙権なぞくれぬ」という下の句が一樣につけてあるが、それがいかにも木に竹をついだようである。しかも、それを唄う男の声がむやみに騒々しいばかりなので、聞いているうちに私はすっかり辟易してしまった。

「あなた方は帝大の方ですか」

ひとくさり唄い終わると、デカンショはこう言って、四人の大学生に言葉をかけた。

「ええ。そうです」

髯のある男が振り返って答えた。

「今日の普選大会へお出でになりましたか」

「青年会館であつたやつですか」

「そうです」

「行きたくつても、われわれは今臨時試験があるんで行けないんです」

「そりや残念でしたな。実に盛大でしたぜ」

こう云つたと思うと、デカンショはしきりに今日の普選大会のいかに盛大であつたか、そして、出演代議士諸君の演説のいかに激越であつたかについて、しきりに話し始めた。

私も今日午後から青年会館で普通選挙運動の屋外大会がある事は聞いていた。しかし、普選問題に

限らず、外交の問責にしろ、内政問題の批評にしろ、由来代議士諸君の演説は石油の空罐同様、いやに声ばかり大きくって中味のからっぽなものであると思つてゐるので、この種の演説を後学のため一度はぜひ聞いておきたいとは思ひながらも、ついぞ出かける気にはなれない。今日も家にいてその開会の花火の音を聞きながらも、そのためとうとう行かずに終つたのである。

「しかし、どうせ今の政治家なんてものは、お互いに声だけ大きくして嚇し合えばよい人だらうから、石油の空罐でも結構間に合うんだらう」

デカンショの普選大会の盛況について、しきりに述べ続けている言葉を聞きながら、私はぼつねんと片隅の卓に倚つて、こんな事を考えながら、一人ひそかに微笑を洩らした。

四人の大学生が経済部であると聞いたためか、染飛白の角帽は、話題を転じて折戸助教授の朝憲案乱事件に及ぼし、さらに最近の社会問題、ことに思想問題にまでも及ぼして行つた。話題が話題であるため、そばに黙つて聞いている私をはばかりのか、それに応酬する四人の大学生はかなり声を低くしてゐるので、どうも私には聞きとれなかつた。しかし、染飛白の角帽の言葉はだんだん大袈裟になつて行くばかりである。

「じゃ、将来レーニン、トロツキイが日本に生れた場合、あなた方はどう態度をとります」

「……」

学生マンントの男が何か答えたが、聞きとれなかつた。

「ハハハハハハそりや愉快ですよ。大いに賛成です。無論、僕だってさあとなつたら大いにやるです。やられずにはおられんですからな」

相手は一人で昂然と言ひ放つた。

「何？ 日本の過激派はいまのところ革命に関係がない。みんな一様に陛下の赤子だって、……ハハハハハ君はうまい事を言って逃げますな」

「いや。逃げるわけじゃないんですが、それ以上、云う事は憚りますよ」

帝大生の一人が少し興奮したようにこう答えた。

「憚るなんて卑怯ですな。第一、誰に憚るんです。学校の当局にですか……そこへ行くとわれわれ私立大学の者は自由ですな。みんな実に激烈な事を云ってますよ。いざとなったら全校一致して大運動に投じようという秘密な連盟まであるんですから」

「そりゃ帝大だって学生間にそういうものがあるかも知れませんが、いまのところみんなほんものは沈黙を守っていますよ」

「沈黙なんて卑怯だな。なぜ起って大いにやらんです。でなければ最高学府の最高学府たる価値がなくなるじゃないですか」

染飛白の角帽は女が下から運んで来た瓶詰の日本酒を、しきりにコップであおりながら、ともすれば相手に油をかけるようにしゃべり続けた。その間、詰襟の男はにやりと笑いながら、黙って側で聞いていた。

両者の議論は酒にあおられるためか、だんだん、内容が激烈になっていった。ことに、染飛白の大学生が、しきりに卓を拳でたたいては、「だから官立の大学なんて窮屈だ」とか「折戸助教授をこのまま見殺しにするようでは、帝大の権威がどこにある」とか、さては、「最高学府だなんて威張っている、学生一同がその大切な思想まで束縛されても黙っているようでは、何の値打もない」とか言うたびに、四人の帝大生はみんなそろって、いかにも負けてはいられないといった風に応酬した。そ

して、四人が四人とも、最初はなるべく控えめに控えめにと気をつけていたのか、酒にあおられた上に、さらに相手の議論にさそい出されたためか、いつの間にか、側で聞いていてもはらはらするほど激烈な事を言い始めた。無論、相手の染飛白ほどに乱暴ではなかったけれど、最初、私が入って来た時折戸事件について話していた時の、つつましやかな態度は、いつかなくしてしまっていた。

やがて、議論の種もいいかげん尽きたためか、口髯のある帝大生が三人の友だちにすすめて帰り支度をしはじめた。

「諸君はさすがに帝大の方だけあって、大いに話せますな。まったく我党の士です。どうか以後何分よろしく」

四人がばらばらと立ちかけると、染飛白の角帽はちょっと椅子から立ち上って、あらためて一揖いちゆう「会釈」しながら名刺を差し出した。

「やあ。有難う、私はこういうものです」

「私。ここに居りますから、どうか遊びに来てください」

「じゃ。また、ここでお目にかかりましょう」

四人の帝大生もかわるがわるにこんな挨拶をして各々の名刺を相手に渡すと、ちょっと、ウエイトレスに冗談を云いながら、そろって梯子段を下りて行った。

やがて下の帳場で女将の礼を云う甲高な声が聞こえて、二、三の笑い声が上がったと思うと、がらがら下駄の音をさせながら、四人は表の硝子戸を開けて往来へ出て行ったらしい。戸口でウエイトレスがまたあらためて礼を言う声が高く響いた。

「やあ。あんたはやはり上手うまいな。さすがに学問のある人は違う」

やがて四人が往来へ出て行った足音を聞くと、詰襟の男ははじめてこう云って相手を見上げた。

「やっぱりそうだ。僕らが平生心配をしないとおり、帝大の奴はみんな危険人物だ。どうも、こうまでとは思わなかったが、実際、驚いた」

染飛白の角帽はちょっと私の方を盗み見た後、憚るように小声でもってこう言った。

「でも、わしはあんたの口の上^{うへ}の手^てい^いのには驚いたな。ああいう風にだんだん話を持ちかけて相手を釣り込んで行くんだからな。きっと下宿の女将も、やはり、その手でうまく釣り込んだものと見えるな」

詰襟の男が媚びるようなおだてるような笑みをちょっと顔に浮かべてこう言う、染飛白の男はその言葉を押し返すように、突然、両手を相手の顔の前に突き出した。

「ばかを言うな。あんな後家さんなんか、我輩が釣り込むものか。ただ、先方の申し込みをこっちが受け入れてやっただけなんじゃ」

「そりやかなわん。そうまで言われちゃ、とても……まあ、これでも飲んでくれ」

詰襟がこう言って、わざと慌てて相手の盃に酒をさすと、染飛白はいかにも得意そうに破顔一笑した。

「それから、今の奴らの名刺をちょっと見せてくれ」

「ああ。そう。そう」

染飛白が詰襟に先達の四人の帝大生の名刺を渡すと、詰襟はポケットから黒い表紙の小型な手帳を出して、それを一つ一つ書き取り始めた。しかも、その間、二人とも何か私に憚るものがあるらしく、時どきじろじろと瞳をこっちへ向けた。私は二人の先刻からの態度がどうも不愉快でたまらな

かったので、ことさら視線をそらしたまま、また、黙ってウイスキーの盃を管めた。

間もなく結綿に結った方のウエイトレスが梯子段を上って来た。が、二人の側を通りぬけようとする、まず詰襟の男がその長い袂を引っ張った。角帽の方もすぐさま、それに力を合わせた。そして私の見ているのをも憚らずに、無理にも女を詰襟の膝の上へ乗せようとした。

「いやよ。そんな事……いけすかない人ね」

女は細長い地藏眉を寄せながら、それでもわざと微笑を含んでこう言った。が、二人はなかなか放そうとしない。

「よして頂戴ってば、よして頂戴よ。そんな事をする女将さんと呼んでよ」

「おかみが何だい」

角帽が呻くように言った。

「冗談じゃなくってよ」

女はこう言ったとたんに、巧みに袂をはずしたのか、きゅっと叫んで小股に三足ほど飛び、いきなり私の前の椅子へ来て坐った。男の手から脱れ得た女の顔を眼の前に見て思わず微笑を洩らした。

「あなた。大変お静かなのね。一人でお寂しいでしょう」

女は今の事をけろりと忘れたように、微かな笑みを眼に見せた。

「おれは昔からお静かなんだよ」

「そう」

私が女を相手に二言三言口をきくと、詰襟の男がいきなりこんな事を言った。

「おい。そっちばかりへ行かない。おれだって同じ人間だぞ。……へん。お馴染か。いやに見せつ